

## 第78回

### 沖繩戦 生死を分けた小指の痛み

※2024年6月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘していただきます。

第二次世界大戦末期に激しい地上戦が繰り広げられた沖繩。日本軍の巨大な飛行場が造られた伊江島は、米軍に狙われて「沖繩戦の縮図」と言われる凄惨な戦場となり、多くの幼い子どもたちも戦果にさらされた。

伊江島出身で当時1歳だった知念勝盛さんは えいせい―沖繩県南風原町は えいげんの左手には、小指がない。1945年5月に米軍が上陸。勝盛さんを背負っていた母が米兵に狙撃され、銃弾は勝盛さんの左手に当たった。ちぎれがかった小指を父が刻みたばこで止血し、包帯を巻いて固定。奇跡的につながったが、動くことも成長することもなく、25歳のときに手術で切断した。

戦争の記憶はない。ただ、日常

生活では嫌でも左手に目が入り、そのたびに「戦争」が突きつけられる。「ヤクザ」「1歳のときを覚えていいのか」。心ない言葉をかけられることもあった。切断した小指は「何かの証拠になれば」とホルマリンに、漬け瓶で保管しているが、国は一部を除き民間人の戦争被害を補償していない。「お金が欲しいわけではなく、戦争被害者として認めてほしい」

戦時中に兄から父たちが「勝盛が泣いたら殺そう」と話していたことを聞いたのは約10年前のことだ。勝盛さんはほとんど泣かなかったという。撃たれたことによる出血で「泣く元気がなかったんだろう」。勝盛さんを苦しめてきた小指のけかが、皮肉にも命をつな

いでいた。



「私をドンッて蹴ったの」。当時9歳だった伊江島出身の並里千枝子さんちやたん―同県北谷町―は、右の太ももをさすりながらそう振り返る。弟の清隆ちゃんが生きようとする。あがいたあの日の感触は、今も鮮明だ。

米軍上陸の数日前から艦砲射撃が激しさを増し、千枝子さんは集落内の「ユナツパチク壕ごう」に避難していた。住民と日本軍ですし詰りめ状態だったという。

米軍上陸後に母の母乳が出なくなり、清隆ちゃんが泣きやまなくなった。そこへやってきた日本兵が少年兵に清隆ちゃんの射殺を命令。ためらう少年兵に日本兵は「それでも兵士か！」と暴行を始め、壕の中は恐怖で覆われていた。

そんなとき、隣で母に抱かれていた清隆さんの小さな足が、千枝子さんの右足を蹴った。いつの間にか泣きやんでおり、「母乳が出

たんだ」と安心したという。しかし、その足が動くことはもうなかった。母も清隆ちゃんの顔を抱きしめ、胸に強く押しつけたまま動こうとしなかった。千枝子さんが清隆ちゃんの死に気がついたのは、しばらくたってからのことだ。

戦後、母は清隆ちゃんのことを語ろうとしなかったが、62歳で亡くなる直前「早く清隆ちゃんを抱きに行かないと」口にした。我が子に手をかけたことを「ずっと苦しんでいたのだと思う」。



泣き声で分けられた赤ん坊たちの生死。勝盛さんは切断した小指を手にも、学校などで公演を続けている。戦争体験者は年々少なくなっているが、「当時最も若い世代の私たちを、最後の戦争体験者にしなくてはならない」。そう願っている。